

編集後記

『戦史研究年報』第 23 号をお届けします。

本号は令和新時代はじめての発刊です。

巻頭の「史料紹介」では、令和 2 年東京で開催予定のオリンピック、パラリンピックにちなみ、第 8 回オリンピック大会（フランス・パリ）における馬術競技、及び第 12 回オリンピック冬季大会（スイス・サンモリッツ開催予定・第 2 次世界大戦勃発により中止）に関連する史料を掲載しています。

「論文」は、戦史研究センター所属研究者による平成 30 年度調査研究成果の中から 3 本を掲載しました。千々和論文は、昭和 51 年 10 月に策定された、いわゆる「基盤的防衛力構想」が冷戦末期まで維持された要因、同構想の位置づけの変化などについて論じたものです。立川論文は、太平洋戦争後半日本陸軍がフィリピンで実施した治安維持を事例に、抗日ゲリラの活動の様相とそれに対する日本側の対応について、効果と問題点の観点から論じたものです。石津論文は、戦争と宗教の関係について、ヨーロッパにおける十字軍と三〇年戦争を題材に、研究ノートとして検討したものです。

「研究会記録」は、イスラエル・テルアビブ大学アザー・ガット教授が発表された研究会の記録を掲載しました。産業革命のはじまりから 21 世紀に至るまでの戦争と技術革命の関係について検討したものです。

「国際会議参加報告」は、ブルガリア・ソフィアで開催されました第 45 回国際軍事史学会大会の概要及び同大会で藤井研究員が発表した論文（英語）を掲載いたしました。内容は日中戦争における和平の試みの失敗とその後の戦争のエスカレーションについて、個々の軍事作戦が与えた影響に注目して論じたものです。

「活動報告」は、令和元年に戦史研究センターが実施した諸活動、史料閲覧室の閲覧状況などを掲載いたしました。

最後になりましたが、本号発刊のためにご協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

（清水 亮太郎）